

比庵佳境の会

朝明けの雲くれなゐに ちらばりてほそくとがれる 月をかくさず 比庵九十三



第一杯 貰ひし莓 多くして
うれしくして あなうつくしきかも
比庵八十七



清水比庵と万葉集

会長 清水固（比庵の孫）

歌人清水比庵にとって万葉集は歌の故里的存在であり万葉集に育てられたと述べている。特に六十から七十歳台の随筆では次のようにたびたび万葉集に触れている。なお万葉集に縁の深い奈良県桜井市に比庵の万葉の歌の歌碑と大書があるが、これ等については私の従弟の吉田耕一氏が後にふれる。

一 平賀元義（江戸末期歌人）…万葉歌の朗唱

比庵は同郷（岡山藩）の歌人で万葉集を愛した平賀元義を尊敬し、元義が万葉を講ずる時、大きな声で朗唱した事を受けて疎開先の女学校で歌を講義する時や、歌会の最初に万葉の歌数首を朗唱した。

二 あをによし：

比庵曰く「若い時に万葉に育てられたおかげで（あをによし奈良のみやこの…）」と詠み出すと故里に帰り故里の言葉を喋っている心持になる。」

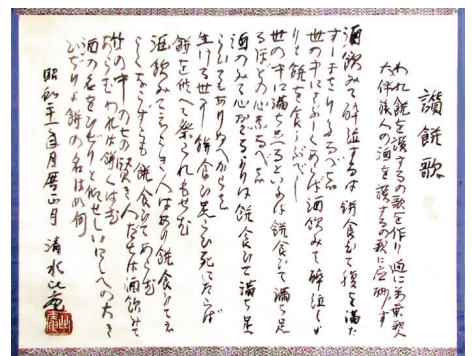
三 言霊（ことだま）の霊力

比庵曰く「（しきしまのやまとの国は言霊の助くる国ぞまさきくありこそ）」という歌が万葉集にあるが、万葉人は言葉の霊力を知っていた。それ故「毎日佳境」といふ言葉も毎日心の中で唱えて居ればその境地に至る事が出来る。」

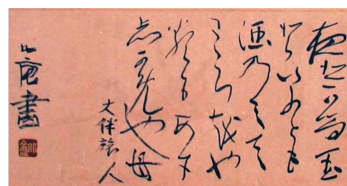
四 餅を讀める歌（大伴旅人の酒讃歌に対応）

酒を嗜まず餅好きな比庵は戦後間もない昭和二十一年正月に「われ餅を讀する歌を作り万葉歌人大伴旅人の酒を讀するの歌に応酬す」として八首の讀餅歌を詠んでおり、これを川合玉堂に送った。なお同時代に大伴旅人の酒讃歌を書いた作品もある。

讀餅歌



餅を讀する歌 昭和21年正月 比庵

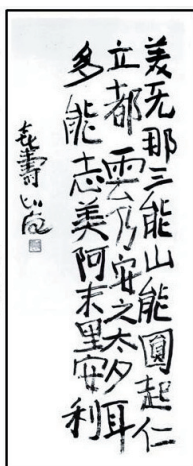


大友旅人の酒讃歌（13首のうちの1首）
夜ひかる玉といふとも酒のみて
こころをやるにあにしかめやも

大友旅人
比庵 書

五 自作歌を万葉風に漢字で

比庵は七十歳台に自作歌を万葉集のように漢字で書くことを好んで始めた。平賀元義は漢字書き歌が多かったことがその背景にある。



みんなみの山のまろきに立つ雲の
あしたにたのしみあまりあり
喜寿 比庵

六 川合玉堂の歌を万葉歌を例に出して評価

敗戦直後に玉堂が文展再開についての意気込みを詠んだ長歌を高く評価し「万葉の舒明天皇の莊重蒼古な御製（大和には群（むら）山あれど、取りよるふ天の香具山、登り立ち国見をすれば、国原は煙立ち立つ、海原は陽立ち立つ、うまし国ぞ秋津洲大和の国は）を思い起こさせる」と述べている。

七 柿本人麻呂の画



柿本人麻呂
家のまはり柿うゑおきて柿の本の
柿まろの歌よまゝくおもほゆ

比庵は人物画としては仏教上の人物の外に良寛と柿本人麻呂を画いている。良寛の画は居眠りや飲酒して踊っているユーモラスな画だが人麻呂の画は真面目なポーズになっている。

八 万葉を詠んだ歌

- ・三輪山はしかもまさか香具山も
うねびの山もともにまさかかも
- ・万葉歌大きな声で朗詠す
大きな声で万葉相聞歌
- ・香久山はたゞにかすみて耳梨は
ひだりの端に少し見えたり
- ・いしづみの棕橋山の夜ごもりの
月の眺めは聖林寺にて

記紀万葉の故里桜井市を訪ねて

吉田耕一（清水固の従弟）

奈良県生駒市在住

奈良県桜井市は東と南を青垣山に例えられる山々に囲まれ「大和は国のまぼろば」と言われた地方で、万葉集に数多く歌われている。

三輪山を御神体とする日本最古の大神神社

（三輪明神）、源氏物語や枕草子に登場する花の寺長谷寺、中大兄皇子と藤原鎌足が談合をした紅葉と蹴鞠の多武峯・談山神社、知恵の神を祭る安倍文殊院、日本最古の道「山の辺の道」、卑弥呼の墓ともいわれる箸墓古墳のある纏向（マキムク）遺跡などがある。

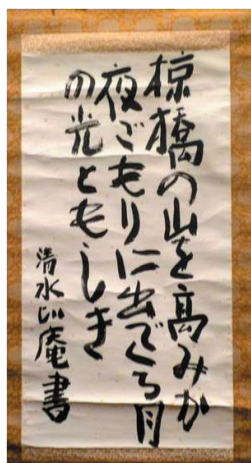
昭和四十六年に市は記紀万葉集に記された歴史の証を貴重な財産として後世に伝えるために歌碑建立を企画し、地元出身の文芸評論家保田興重郎と川端康成が中心になって各方面に呼びかけ、比庵を含む多くの文化人が記紀万葉集の中の歌を揮毫して三十四基の小歌碑（現在は六十四基）が建立され、山の辺の道の路傍や社寺の境内の片隅に置かれている。

比庵の歌碑は聖林寺の山門の傍らにある。聖林寺は多武峯山麓の高台にあり、三輪山が一望でき、天平彫刻の傑作「国宝十一面観音立像」がある。

桜井市は町興しの一環として記紀万葉歌碑の原書展を昨年十一月に開催したので比庵の孫である清水固の代理として参観した。歌碑を揮毫したのは昭和を代表する文化人五十四人だが、現在も健在なのは千玄室（先代宗室）ただ一人である。比庵の書は間人宿禰大浦の歌（万葉集巻三・二九〇）であり貴重な原書を拝観できた。

「棕橋の山の高みか夜ごもりに
出でくる月の光ともしき」

棕橋（くらはし）の山が高いため夜も更けてから出てくる月の光は何ととほしいことよ
歌碑除幕式に出席した比庵は色紙に



聖林寺歌碑原書

「わが書きし万葉歌碑の聖林寺
棕橋山の月の見ゆるはなし」

と書き、あとからこの歌の連作として

「いしづみの棕橋山の夜ごもりの
月の眺めは聖林寺にて」

と詠んだと随筆駒込だよりに書いている。

この原書展参観の時に桜井市観光まちづくり課を訪問し、比庵の奉納額が大神神社にあることを知った。市の観光課長から大神神社広報課長を紹介してもらい、十二月に見せてもらいに行った。

大神神社は大和の国の一の宮で三輪山を神体

額田王下近江国時作歌

天智六年（687年）の近江大津宮遷都に際し
古京飛鳥を去るに当つての作

味酒（ウマザケ）三輪の山

青丹よし 奈良の山の

山の際（マ）に い隠るまで

道の隈（クマ）

い積るまでに つばらにも

見つゝ行かむと しはしばも

見放（サ）けむ山を 情なく

雲の隠さふべしや

反歌

三輪山を しかも隠すか雲
だにも情あらなむかくさふべしや

九十一叟 清水比庵書

通釈

長歌

三輪の山は奈良の山々の山間に隠れるまでも、道の曲り目が幾重にも重なるまでも、つくづくよく見ながら行きたいのに、何度も眺めたい山なのに無情にも雲が隠すなんてことがあってよいものだろうか

反歌

三輪山をまあそんなふうに隠すものか。せめて雲だけでも情があつてほしい。隠すなんてことがあってよいだろうか。

山として本殿を持たず、古神道（原始神道）の形態を残して重要文化財の拝殿がある。

神社の旧大社記念館の広間に比庵の奉納額（扁額）が掲げてあり、縦約一米・横約三米の大額である。書は万葉集を代表する女流歌人「額田王」が飛鳥から近江の国に下る時に詠んだ長歌・反歌を書いたもので、素晴らしい作品だった。この扁額があることは清水家の子孫も知らなかったようで、新しい比庵作品の発見だった。比庵佳境の会の皆様！ 奈良を訪れる機会に「万葉のふるさと」桜井市まで足を延ばしてみたら如何ですか。

比庵の書から

齋田 和子（書家）

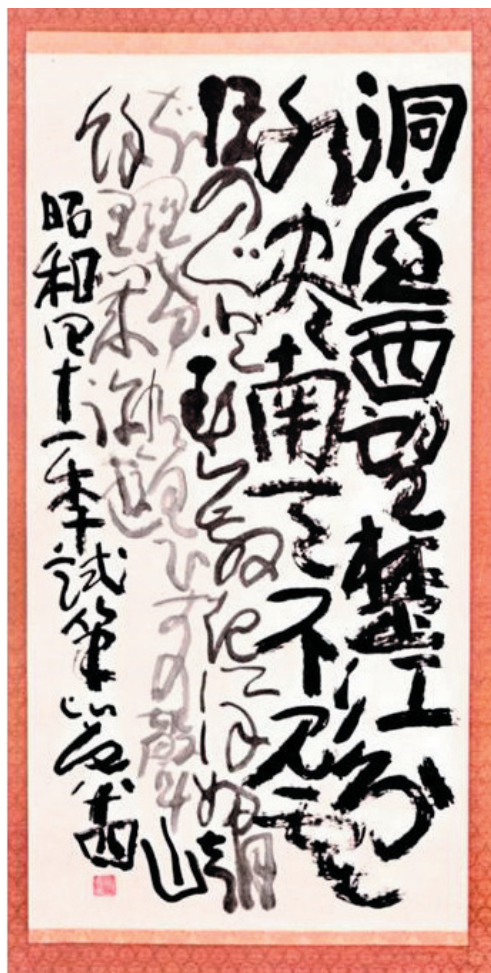
書道研精会発行（1967年）の清水比庵集の中の漢詩と自詠歌を組み合わせた八十四歳の作品に目が止まった。書き始めから男性的な力強さに誰が見ても圧倒される。生きる力が漲っている。

二行目の「水」のあたりから掠れはじめ「天」に至っては筆に溜った墨を押し出し絞りゆつくり紙に食い込ませた筆使いに一層の力強さが感じられる。次の「不」で墨をつけその濃淡が見どころで、次の「雲」が「天」同様見事な掠れの効いた雲の表現にうつとりする。女手と言われている仮名文字と変体仮名を織り混ぜながら淡墨で書かれ、和蠟燭の炎が揺れ動くようななよやかな雰囲気漂う。最後の「昭和：」と試

筆の年と署名の所は漢字の書き初めの墨色と同じことが全体を纏めている。

限られた紙面一面に自由闊達にそれぞれ個性を持ち、バラバラに動きのある書が書かれているが、どういう訳かうるさくない。喧嘩していない。男性（漢字）と女性（仮名）が共存共栄しているかの様に見えるのは固より、もう少し拡大し誇張した言い方が許されるなら、この地球上には多種多様な民族が各々の持ち味を変え、この出来ない特異を持つて生きている。違いを受入れ尊び認め合いながら「和」を持つて共に生きていくことがこれから特に大切な時代、この作品の中に個を持ち自由に伸びやかであるが隣との譲り合いを大切に融合してゆくほのぼのとした世界を見る。

比庵の書の世界は一貫して自由の中にも和があり、そこが魅せられる。作者のお人柄を垣間見る思いがする。



洞庭に市望蘇江分 水尽南天不見雲

ほのぐ登むら散起に保婦朝

本羅希有具ひすの聲山 餘里幾許遊

昭和四十一年試筆 比庵八十四

日光小杉放菴美術館

「清水比庵展」を訪ねて

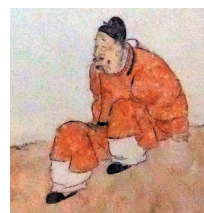
比庵佳境の会会員 片柳 守・芳枝

新春の陽光が眩しい中、のどかな車窓風景を眺めて東武鉄道で日光に向かいました。快速で一時間四十分（春日部―日光）の夫婦二人旅です。日光駅の正面を出るとロマンチック街道（百十九号線）があり、これを右折し、整備された古い街区を二キロメートル程歩くと神橋があります。神橋と平行に架かる国道橋を渡り右折するとすぐに小杉放菴美術館があります。バス便もありますが、片道だけでも歩くことをお勧めします。近くには輪王寺・東照宮があり、纏めて世界遺産となる由緒ある地区です。地元出身の小杉放菴に因んだ市立美術館で、この度の比庵展が開催されています。日光は比庵先生にとって第二の故郷と云うべき場所ではないでしょうか？ 古河電気日光精錬所の勤務から始まり、日光町長時代を含めると十一年間を過ごされた場所です。

町長としては観光行政に力を入れ、全国初の観光課設置・温泉原開発・東洋一のスケートリンク設置など功績は大きく、後に名誉市民に選ばれています。一方では短歌会「二荒」を主宰し、下野短歌会や後の「窓日」短歌会の先駆となる取り組みを始めています。歌集「二荒」の表紙画は、小杉放菴の手によるもので、放菴とも知己の関係であった様です。県都宇都



牡丹（大日光表紙画）



柿本人麻呂の画（左比庵 右放菴）



良寛の画（左比庵 右放菴）



宮・日光市の近在は、今でも窓日短歌会が継続され盛んに行われています。

さて、展示会ですが、比庵先生の書画四十八点が展示されています。ほのぼのとした作風の書画が広い展示場に飾られて見応え十分です。「柿本人麻呂」「良寛」「かぼちゃ」の題で放菴と比庵の作品が隣り合わせに展示されており、比庵の温か味のある作風と放菴の枯淡の味の作品に二人の特徴がよく出ています。私としても初めて観る作品もあり、楽しく鑑賞することが出来ました。

私事、小生は比庵先生の一ファンですが、妻も絵手紙に傾注していて書・画を座右に置き学び・楽しんでおります。比庵佳境の会での交流を深め、機会がありましたら歓談致したく、宜しくお願い致します。

光明寺比庵展の報告

比庵佳境の会事務局長 比留間 哲生

かねてより、清水比庵のお孫（清水固）さんの地元である横浜市栄区庄戸では噂に聞く比庵の作品を近くで直接見たいという要望が強くありました。また清水固さんご自宅に所蔵する作品を近所の人達に見ていただきたいと希望していました。そこで鎌倉時代から存続する由緒ある地元（歩いて十分）の光明寺（鎌倉の光明寺と間違えた方がいました）が最適な場所と私は目を付けていました。境内の落ち着いた雰囲気の中で展示できたならと地元の名士の前住職さんに相談したところ快諾を得ましたので会報第2号でお知らせしたように比庵展を企画し昨年十一月二十六日に成功裏に開催できました。素人集団が奮闘したその状況をここに報告します。



陳列に工夫を凝らした光明寺の会場

会場はお寺の法事などを行う会館で会議用の長机を部屋の真中に十四台を並べて白布で足元も隠して陳列台を作りました。その上に平置きで十六点の額を上から目線で鑑賞できるように白布の下に本を枕にして角度を持たせて陳列しました。また周りの壁側にも白布で覆った長机を十四台押し付けその上に壁を背もたれで額を立てかけました。作品が滑り落ちないよう針金で細工した簡易イーゼルを考案し（素晴らしいアイディアだと褒められました）、十六点の大小額を安全に陳列できました。その他いろいろと工夫して全部で五十五点

の額の作品、図書、その他が地元の人たちに初お目見えしたのです。清水固さんには適時ギャラリートークをして頂き理解が深まったと大変な評判でした。

たった一日の催しでしたが百人程の地元の方々に喜んで頂き「一日ではもったいない。又やってくれ」、お習字の先生方からは「歌が素晴らしい。掛軸が無いのが残念！」「初めて比庵作品を見て感銘しファンになった」などの感想も聞かれました。また機会を見て掛軸も飾れる設備の整った会館をお借りして数日間の開催を考えたいと思いました。最後になりますが十三名のこの地域の方々のお手伝い、地元中学校の御協力と地元の色々な施設に宣伝のご協力を頂きました。この場をお借りして厚く感謝する次第です。

遠山記念館 清水比庵展のお知らせ

遠山記念館学芸員 小野 恵

遠山邸は日興証券創始者の遠山元一が母美以のために昭和十一年に作った建坪だけで四百坪以上ある埼玉県を代表する近代和風建築です。其の後邸宅と所有する美術品を公開することを目的に美術館を併設して（財）遠山記念館として昭和四十五年に発足しました。

翌年清水比庵の米寿記念作品集「野水帖（やさしいちよう）」を見た遠山元一がその作風に惹かれて同じ証券界にいた比庵の弟清水三溪を紹介して三十数点を譲り受けました。

今回展示する作品の中には四十二歳の若き比庵（當時は七舟）が母のために作った歌屏風があり、親孝行の元一には共感するところが大きいにあったと思われまふ。この外清水家の協力もあって五十点程の作品を展示いたします。老いの若さと観る人の心を癒す魅力にあふれた作

品をご鑑賞下さい。また比庵が銀行員だった頃（大正時代）の絵手紙も展示致しますので絵手紙愛好の皆様も御覧下さい。

開催期間は三月二十二日（日）～五月一日（日）で、四月十九日（日）の午後一時半から清水固氏（比庵の孫）の特別講演「祖父比庵を語る」があります。この外に遠山邸自体も參觀できますので合わせてお楽しみ下さい。

入館料 大人 700円 学生 500円
中学生以下は無料
（団体20名以上は2割引となります）
交通 ●東武東上線・J R埼京線・川越駅
●西武新宿線・本川越駅
●J R高崎線・桶川駅
川越駅～桶川駅間の東武バスで牛ヶ谷下車、徒歩15分
●開館 午前10:00～午後4:30（入館は4:00まで）
●休館 月曜日（祝日の場合は開館、翌火曜日）
年末年始、2月10日、3月17日、4月14日、5月12日
●美術館のみ展示替え休館
2月11日～13日、3月18日～21日、
5月13日～15日、7月7日～31日
●詳しい展覧会情報は下記をご覧ください。

URL <http://www.e-kinenkan.com>

会費納入のお願い

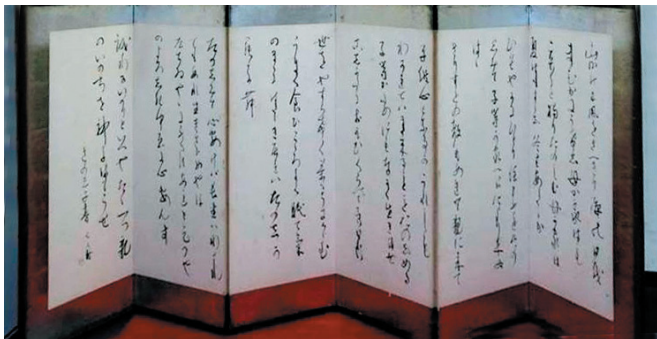
二十七年度の会費を左記に納入されますようお願いいたします。

一口 1000円（複数口歓迎）
三井住友銀行鶴見支店普通 7061558
名義・・・クボタノブユキ

編集後記

比庵佳境の会の秋の行事・神代植物公園のバラ園と深大寺探訪は、昨年十月二十八日、比庵の会、窓日、絵手紙の会などから三十八人が参加され、盛会裏に終えました。秋晴のもと咲き誇る秋バラと新蕎麦を楽しみ深大寺を拝観。帳堂住職から当寺と比庵の関係などユーモア溢れた講話を拝聴し、比庵と親交のあった延暦寺第二五二世座主菅原榮海師の令孫で現在深大寺の僧侶菅原常光さんから秘蔵の比庵雀の掛軸を

ご披露頂き、境内の比庵生前最後の歌碑を訪ねるなど充実した秋の一日でした。多数のご参加有難うございました。



比庵が若い頃（大正時代）に
独り住いをしている母に十首の歌を屏風に書いて贈ったもの

母に贈る歌
山かげに風をさへぎり海の日を
まむかにうけし母の家なほ
こそと独りたのしみ母が家は
夏はすゞし冬はあたたか
ひそやかにひとり住まふをたのしみて
子等が家へはたより来ぬは
きりすとの教もあれと親に来て
子供心となるがうれしも
わかれてはまた来ることをたのしめる
子等が為にもながく生きませ
こしかたにおもひくらくてこの日頃
世をやすらげ茶もうまからむ
うまく食ひころよく眠て気のまゝに
はたらき居ればたのしからなむ
たのしみて心安けは長生きは
わすれどもあれ生きざらめやは
たちあやうにぶくあれど色つやの
よろしきゆゑに心安んず
誠わがいのりといへやたゞ一つ
親のいのちを神よまもらせ
きのえ子春 七舟

比庵佳境の会

会長 清水 固（清水比庵の孫）

〒247-0022 横浜市栄区庄戸 3-5-18

TEL&FAX 045-893-8932

URL: <http://www.hat.hi-ho.ne.jp/katashi-shimizu/>

事務局：村上 信行

〒247-0022 横浜市栄区庄戸 4-15-4